
身事バレエ教室

威鷺羽

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

身事バレエ教室

【Nコード】

N6450W

【作者名】

威鷺羽

【あらすじ】

身事夢子はバレエの先生。夢子の話しと夢子の生徒たちのオムニバス。

第1話

私の名前は身事夢子。みことゆめこバレエ教室を主宰しています。バレエ教室
っていつても今年の春にできたところでも小さいお教室
です。先生はもちろん私1人。

名前は身事バレエ教室。K県の海沿いにあります。私Uターンし
てきました。小さいときからバレエが大好きでレッスンには熱心だ
ったです。実家から片道1時間もかけてバスでバレエレッスンに行
っていました。バレエは楽しくて遠いお教室に通うのも苦にはなら
なかったです。

夢かなって都会のバレエ団に入団した時はそれはうれしかった。
好きなようにさせてくれた両親に感謝！だけどバレエの世界は狭く
かつ厳しい。プリマなんかなかなかない。小さな役1つ、もら
えない。・・・とうとうスターになれなかった私。

両親があいついで亡くなり私も独身のままバレエ一筋でとうとう
三十路。家業の船具商を継いだ兄から戻ってこい！との連絡を受け
てバレエ団に役のない私も年取っていずらくなって退団。そして小
さい我がお城イコール身事バレエ教室を開設したわけ。

バレエ教室という同じ商売敵は田舎すぎてどこもない。そのかわ
り需要がありませんということと生徒数は今のところ14人ぐらい
しかいない。けど少ないけれどかわいい私の生徒達。いずれ彼女
達からプリマが生まれるかもしれない。自分の叶えられなかった夢
を彼女達の誰かがかなえてくれたら。

いや、かなえてくれなくともいい。バレエを好きになってバレエ
を楽しんでくれたらそれでいい。だから私はいずれプロになっても
困らないよう、基礎は厳しめにかつ踊りは踊りやすい曲目を選んで
楽しく踊れるように配慮している。

おかげで好評で口コミで増えてきつつある。大人からの要望もあり、大人向けバレエストレッチ教室も作ろうかな、と考えている。いわば充実した毎日をすごしているの。

さて、後裏守弘氏しんむらうひろしが私のこの身事バレエ教室に見学に訪れて来たのは本当に突然であった。

第2話

ちようと未就学児童のレッスンタイムで、いきなりぬつと入ってきた大柄な後裏氏あしりにびっくりして生徒達は踊るのをやめて棒立ちになった。リズムカルなバレエ音楽が流れる中、子供達はじっとドアに立つ後裏氏を見つめる。後裏氏は苦笑していたがまたこの状況をおもしろがっているように見えた。

後裏守弘氏あしりもさひろ。

かれは背広をりゅうと着こなし、きちんとした身なりだった。多分仕事の途中に思いついてこちらに寄ったのだろう。この港町にすんでいるものなら後裏氏の家をだれでも知っている。港町を見下ろす山のとっぺんに別荘がある。それが後裏氏の持ち物だ。彼は東京の金持ちらしい。しかも東京と別荘を行き来するのに大きな外車を使うので嫌でも目立つ。なんでもこの不況の中円高を逆手に取った貿易関係で大儲けした成金だといううわさだ。

そういう人が私の身事バレエ教室に入ってきたのである。初対面だが私だってああこの人がうわさの後裏氏だなってわかった。小さい生徒達すらもあの山のとっぺんにすむ金持ちだとわかったのだから。

私のバレエ教室は狭くて小さい。玄関を開けるとすぐレッスン場だ。階下が兄が継いだ船具商店だからいわば間借りしているのだ。

私は生徒達も少し待っているように言いつけ、後裏氏の方に近寄った。まだ見たことはないが彼には若い奥さんと小さな娘さんがいると聞いている。もしかしたら娘にバレエをやらせようとしてきたのかもしれない。そうだったらいいのに、と一瞬さもしい考えがうかんだ。金持ちの資産家の娘を生徒にするということはその分発表

会などにお金がかけられる。後援もしてくれるかもしれないからだ。いやそうじゃないかもしれない、そんな考えを振り払って私は後藤氏に声をかける。

後裏氏は私に会釈をしてまっすぐ見つめた。年頃は50歳かいや、もう少し若いかな。白髪がいやに目立つので老けてみえるのだ。

「ここは身事バレエ教室ですね。あなたは、この先生ですか」

「そうです。身事夢子です。あのう、ご見学ですか」

後裏氏は私の読み通り、自分に7歳の娘がいてバレエを習わせようとしてこちらに見学にきました、と告げた。

後裏氏自身はバレエを知らなくてどんなものかまず自分で見に来たようだ。そもそもバレエをするのにまず見学、ということになるが母親ではなくて父親が来ると言うのはめずらしい。

私は快く見学を許し、小さな椅子を持ってきて入り口近くのレッスン場のすみっこですわって見学するように言った。

開校してまだわずか2カ月。この未就学児のクラスはわずか5人ほど。みんなバレエを一生懸命覚えようとしているところだ。拙いながらも音楽にあわせて身体を動かす。小さいレオタードにフリルのついたスカートを手でつまんでスキップする。

「はあい、じゃもう1回さっきのやりましょうね。背筋をぴんと伸ばして、おひざはまっすぐ。はい、進んでー」

2人ずつ順番にレッスン場のはしからはしまで踊らせる。といってもまだ超初心者なのでスキップだ。

最後にエンドレスで輪にさせてすすませる。まだ足がもたつく子には手をつないで一緒にすすむ。

「はい、みなさん、いいですよ。今度は先生の動きを見てね」

私は右足を軸にして、左足をコンパスのようにまわしてバレエ式のおじぎを教えた。これは第1回目のレッスンの終わりに必ずさせている動きなので、まあできるようになっている。

小さな子供たちが5人、横に一行におしりを突き出してあひるのように並んでいると、バレエを知らない人間でも思わず「かわいい」と微笑んでしまう。

後裏氏も例外でなくここにこしていた。小さな生徒達は後裏氏が気になるらしくちらちらと後ろを見たり大きな鏡に映っている後裏氏をじっと見つめたり。落ち着かないでいる。

後裏氏の娘さんがこのお教室を気に入ってくださったらいいのに。
・私は窓から入ってくる潮風を吸い込む。

ここは港町なので潮風の匂いがこのお教室もしてくるが気にならない。そこでバレエを教える。Uターンすると決めたときは都落ちという気分ではなかったが、故郷に帰ってきてよかったと思っている。いけない、また話しがそれてしまった。

第3話

レッスンが終わり生徒の姿が消えるまで、後裏氏は動かなかった。最後の1人がさようならのあいさつをして消えるまで彼は口を開かない。彼は娘にバレエを習わすためにここに来たのではないか？

とうとう私と後裏氏の2人だけになり、私がレッスン時間と受講料金を書いた小さなチラシを持つてくると後裏氏は娘はこのレッスン場まで通わせるつもりはないという。私に別荘のところまで来て教えてやってくれと言う。

なにかわけがあるな、と思った。別荘とは聞いているのに、いつのまにか娘がずっと住んでいるのだ。後裏氏は説明した。

彼の娘の名前は杏里^{アンリ}。7歳だという。幼少時から身体が弱く外に出せないで、先生の方から教えにきてくれないうという依頼だった。いわば出張レッスンをしてくれということだ。

杏里にバレエを教えにきてくれるなら、別荘の地下室をバレエ専用に変えるという。現在は後裏氏専用のジムとゴルフ練習場になっているが娘のために明け渡すと言う。ジャンプしても大丈夫な高い天井、足を痛めないようにバレエ専用のリノリウム床を張り、壁一面鏡張りにする。壁沿いにバーをつける。音響効果も全部1級建築士に依頼するつもりだと言いつつ切った。

こりやうわさ通りの成金の金持ちだわ……。そっぴやこの窓から見える別荘だってしゃれた造りだ。これも有名な建築士のデザインなんだろうな。

もちろん私は2つ返事でOKした。出張レッスンは苦にはならない。まだまだ生徒数は少ないし時間はいくらでも開けられるからだ。・・・いい生徒さんが入ってきたものだわ、私にも運が向いてきたかも。

杏里という娘さんにもバレエの才能があれば、コンクールにもばんばんだせる。コンクールにはお金がかかる。だが後裏氏なら大丈夫。留学だってなんだってさせることができるだろう。私はうれしくなった。

でもなぜこのバレエ教室ではいけないのか、我に返ってまずはその理由を聞きたいと思った。先生を独占して1人レッスンもいいかもしれないが、発表会の時はどうするのか。最初からソロで（1人で）踊らせるわけにはいかない。また仲間意識も必要だし、やはりここはグループレッスンから参加してほしいところだ。

「あの、どうしてグループレッスンがお嫌なのですか？ 差し支えなければ教えてください」

「そうですね、いずれわかることですから」

杏里が外に出せない理由は驚くべきことだった。何のことはない彼女にはアトピーと喘息があり、それがとても重いのだそう。東京の空気も悪いのでこの港町に別荘を建て、彼女にはこの春からそこに住まわせているのだと。

アトピーの子って私の教室にも何人かいる。重症のってどんなのだろう。だから本当は小学校の1年生になるはずだが行かせてないという。勉強は後裏氏の妻が教えているらしい。そのまま当面はそうするつもりだと。だけど家に閉じ困りきりだとしても運動不足になる。空調に気を使い娘専用のバレエ教室をしてもらえば喘息も良くなるだろうと言うのだ。

「そういうご事情ですか。じゃあ、学校も・・・」

「理由を言って登校を見送っています。実は1昨年あの子の母を亡くしまして、それからちよっと心身が不安定なのです。私には去年結婚したばかりの後妻がいて、継母にはなりますが彼女をよく見守ってくれています」

「バレエをやらせるというのは奥様のお考えですか」

「いや、杏里自身が頼んだのです。なんでもテレビでバレエを見て自分もやってみたいと言いつ出したのです。あの子が私に頼みごとをするのは初めてですがね。」

妻は杏里を外に出すのを反対していますが杏里はどうしてもやるといつてきません。それで折衷案として出張レッスンを依頼してきたのです」

内心、過保護すぎるとは思ったものの、当然私には異論はない。即断で了承した。

後裏氏も喜んで月謝にガソリン代とあわせて出張代金と称して破格のレッスン代金をその場で支払った。

そういうことで・・・週2回ずつ私は山の上の後藤氏の別荘に出かけることになったのである。

第4話

というわけで前置きの話ですがすごく長くなったが、あの海の上の丘の別荘に私は週2回、後裏杏里うしろあんりのために個人レッスンを開始したのである。

後裏杏里。どんな女の子か、私は楽しみだった。母親に連れられて、バレエを始めた生徒と自分からバレエをやりたいとだだをこねて母親を連れてきた生徒とはバレエを習う意気込みが明らかに違うからだ。この場合は父親1人見学させたただけだけだ。

初対面から私達は気があうとわかった。

杏里のアトピー？は確かにひどかった。多分学校へ通学させたらいじめられるというのはあながちうそでもなかるう。人間の女の子の顔ではなかったからだ。

目と鼻は確かにある。口もだ。しかしその境界線と言うのが吹き出物でばやけていてわからないのだ。眉毛もぬけおちてなかった。髪の毛すら半分なかった。

しょっちゅう無意識にかきむしるらしく、そのたびにぼろぼろ表面の皮膚がおち、新しく血がにじんで洋服を血濡れにし、床を汚してしまうのだ。

顔、頭、そして手足、身体。ほぼすべてに吹き出物ができていた。彼女はかゆみと痛みに耐えながらもはきはきと私にあいさつした。私はその様子にとっても好感をもった。反対に杏里の義母になった女性には正直感じが悪く、好きになれないな、と直感した。

この女性とはあまり年が変わらないように見えた。正直後裏氏はこういう険のある女性が好みなのかと意外に思ったぐらいだ。名前は後裏消絵うしろけいえ。

どうみても夫婦の年の差が20歳はある。温厚な後裏氏にどうとりいったのか不思議だった。美人は美人なんだけど・・・？

義母といえども杏里をかわいがりよく世話をしているのかもしれない。

ないが、バレエをやらせるのに彼女はあきらかに反対していたのだ。私には一応冷やかであつてもあいさつはしたが、こういう症状が出ているのでバレエはやらせなくなつたのです、とはつきりいつた。後裏氏はその時の場面にも同席されていたのだが、後妻には何もいわなかつた。

その女性は「あなたは杏里を甘やかしすぎます、地下のレッスン場だつてどうせ長くはもたないしお金の無駄だわ」と初対面のバレエの先生の目の前ではつきりと言つてのけたのだ。

後裏氏は黙り込み、杏里はうつむいた。それから顔の皮膚をいきなりばりばりと掻きむしつたのだ。血が私の方まで飛び散り白くかわいた皮膚がばらばらと落ちた。

消絵ママはそれを見ると「汚いわね、杏里。やめなさいってば」と怒鳴つた。その様子を見て杏里をかわいがつてよく世話をするつて本当かしらという疑問がわいた。後裏氏は仕事が忙しすぎて家族と過ごす時間はそんなに多くないのかもしれない。だから普段の様子かわからないのかもしれない。

だけどその消絵ママが憤然と部屋を出ていくなり杏里は私にっこりして見せた。顔が吹き出物でふさがれていても血だらけでも目の輝きまでは消せない。

後裏氏がポケットから大きめの医療用ガーゼを取り出しそのビニールをやぶつて血を拭つてやつた。後裏氏は穏やかな顔で娘からでた汁を丁寧に拭いてやつている。

バレエを学ぶ喜びに彼女の顔は光り輝いていた。私は杏里が大好きになった。きっと杏里の方も私のことが好きになつてくれたのに違いない。

私は杏里と後裏氏に「アトピーはレッスンには関係ないのでこれからさつそくレッスンを始めましょう」と言つた。杏里は飛び上がつて喜んだ。

すぐに地下のレッスン場に案内されたが急ごしらえの部屋にして

は上出来だった。バレエ用の足を痛めない床に総鏡張りの壁面、音響効果まで。広さも私のレッスン場の2倍はある。申し分なかった。短い期間の間にこんな田舎でこれだけの工事をしてのけた後裏氏の経済力に私は敬意をしめた。娘にバレエを習わすためには、経済力の多少はどうれあれ、バレエに理解がないと自分がかせいだお金を娘のおけいこ事にまわせないからだ。私はバレエで生きているバレエの先生だから、娘たちを習わせるすべての親御さんには敬意を示す。

レオタード姿になった杏里はともかわいかった。後裏氏が東京まで出ていってわざわざ買い求めたらし。ピンクのタイツにピンクのバレエシューズ、ピンクのレオタード。ピンクづくしだった。

「ピンクが好きなのね？」と聞くと杏里はにっこりした。

「よく似合うわ！」とほめると杏里はまた跳ねあがって喜んだ。

タイツ越しににじみ出てくる体液やレオタードから見える皮膚のてこぼこ、腕の様子も痛々しい有様だったが踊るという喜びに彼女は輝いていた。

私は杏里にバレエの最初の最初。基本から丁寧に教えた。

バレエの姿勢、立ち方と足の1番から5番。おまけの6番と。

それとプリエとバレエ式のあいさつのやり方を教えて最初のレッスンは終わった。

杏里は熱心によくついてきてくれた。熱心さのあまり身体のかゆみも忘れて掻きむしったりはすることはなかった。この情熱がずっと続くならばこの子は伸びるだろうと思った。また体つきもよい。スレンダーで手足が長い。年の割には背が高い。後裏氏も背が高いのでこの子も伸びるだろう。私は週2回、ここで教えることになったがとても楽しみになった。

後裏氏は最初のレッスンだけ付ききりで見学していたが始終にこにこしていた。杏里もにこにこしながらバレエを習っている。

義母の女性はとうとう姿を現わさなかった。それでも平気だった。

杏里はバレエを習い父の許可を得、私とレッスンはじめたのだから。

第5話

杏里へのレッスン、はじめて2週間。まだわずか4回目。だけど杏里のバレエレッスンに対する情熱はまったく衰えを見せない。新しいポーズやバレエの言葉を教えるたびに目を輝かせて覚えようとする。身体も毎晩私の言った通りにお風呂上りに柔軟体操もかかせていないらしく、やわらかくなってきたと自分で言う。

もちろんまだまだ初心者だがこの熱心さはバレエを続けるのには欠かせないモノだ。週2回ではなく、毎日すればもっと伸びるだろう。それにはまずアトピーをなおして私の教室で他の生徒と一緒にレッスンを受けてもらいたいものだ。

やはり初心者は個人レッスンよりもグループレッスンから初めてもらいたいと思うからだ。

だが杏里には全くの初心者にしては、リズム感があつた。覚えるのも早い。だから私もいつい時間忘れて熱心に教え込んでしまふ。それぐらい杏里の熱心さに引きずられてしまったのだ。

今日のレッスンも20分ほど時間オーバーだった。これで今日のレッスンは終わりにしよう、という杏里は息をはずませて「身事先生、私はバレエが大好きです！」と叫んだ。私はもちろんその言葉をつれしく思った。こうして私達はバレエを通じて仲良くなったのだ。

週2回といえどもレッスンのためにこの別荘に通つてくると聞くとともにしに様子がわかってくる。

後裏氏の後妻かつ杏里にとって継母にあたる消絵ママはまず見かけない。家には杏里だけだった。メイドはいたようだが杏里自身が消絵ママがあなメイドはだめと次々にやめさせたようだ。

食事の世話は結局消絵ママがアトピーよけの手をこんだ献立だけは作るらしい。

家の人間関係には私は関係ないのでかわりたくはないが、はっきりいって消絵ママは杏里をかわいがっていない。孤独な杏里がかわいそうだった。

彼女には小学校へ行かせず（いじめにあうと消絵ママが反対したそうだ）友達もできず唯一バレエだけが楽しみなのだ。

消絵ママの杏里に対する無関心さが理解できなかった。食事などにはこだわりを見せると言うが本当だろうかと言うのが私の本音だ。杏里は消絵ママがいつも私のアトピーを心配してくれるのでうれしいと言う。だから彼女からバレエをすることに今でも反対されているのが悲しいと言う。

一度彼女にもレッスンの様子を見てほしいのだが姿も見せないのもそれはできなかった。杏里をかわいと思うならば、一度だけでも見てほしかった。彼女がどんなに喜んでバレエを踊るか、熱心に受講しているか、ぜひ見てほしかった。

「ママに渡しておいてね」と杏里に託して手紙も書いたが返事もなかった。

消絵ママも実は子供のころはアトピーがあつたようでありまだにヨモギエキスの入った漢方の美容エキスを自分で作ってつけているそう。今は綺麗に治っているのですね杏里自身も治ると思っていよう。

だが見る限りよくはなっていない。ヨモギもよいとは聞くが消絵ママの手作り品というし、一度病院受診を試みたらどうかと提案したが杏里は嫌だと言う。

杏里の本当の産みの母親は杏里の弟の出産時に麻酔のミスで母子とも死亡。病院の対応に納得できず現在もなお医療訴訟進行中ときけばそう強いこともいえなかった。

それにしてもアトピーってこんなにひどくなるものかしら・・・？季節は夏の暑い盛りにさしかかったがあまりよくならない。レッス

ンが終わると、レオタードやタイツの色は必ず変わる。汗の色ではない、アトピーの浸出液によるものだ。

相当かゆいらしく時折踊ってないときに無意識に腕や顔をぼりぼり搔いて、また新しく今度は血を流したりする。だが出血してもなお、かいたりする。これって悪循環じゃないか。

聞けば去年の今頃まではまだましだったそうだ。

でもレッスンをすすめていくにつれて私は不思議なことに気付いた。彼女は腕は搔きむしってもレオタードとタイツの上は決して搔きむしったりはしないのだ。

第6話

レオタードの上はかゆくないのだろうか？

私は不思議に思つて杏里に聞いてみる。

「あの、私も不思議なの。バレエをやっているうちにだんだんかゆくなくなっちゃった。こんなのはじめてです。アトピーも治るかもしれないですね、先生」

「まあ・・こういうことってあるのかしらね？」

「先生、私バレエをはじめて本当によかった！先生とのレッスンが終わったら私すぐにおさらいして、それからレオタードをタイツを自分で洗うの。自分の部屋で干しておいて、それから毎晩寝る前にもう一度レオタードとタイツをつけてストレッチをして寝るの。そうすれば身体もやわらかくなっていくし。」

それからまた自分で洗うでしょ。自分の部屋で干しておいてそれを見て今度先生がこられるの、あさってだな、楽しみだなあってバレエシューズをだいて寝てるの。

早くトウシューズもはけるとうれしいなあ。でももっとがんばらなきゃだめね」

「杏里ちゃん、バレエがそんなに好きだったのね、先生もうれしいわ」

「えへへ」

実際杏里は覚えが早いと思つていたが自分の部屋でまじめにおさらいと称した復習をしていたのだろう。本当に短い期間で身体がやわらかくなってステップもバレエらしくなっている。だが、私はその杏里の言葉になにかひつかかるものがあつた。

「だんだんなおつてきてよかったわね。でもなんで身体と足だけなんだろうね？顔はそのままだね、なんでだろう」

「私もわかりません、消^{きえ}絵ママからもらったお水も毎日ちゃんとつけているのに」

「お水ってなに？」

「消絵ママが作ってくれるの。ママもお水でだんだんアトピーがなおったって。ヨモギが入っていてとてもいいにおいな」

「へえ・・・そお・・・？」

「先生、見る？とてもきれいな瓶にはいつていてきれいな水色をしているの」

「うん、ちょっと見せてくれる」

杏里は自分の部屋に戻りすぐに瓶をもってきた。なるほどとても美しい凝ったデザインの瓶に入っている。だがサイズがとても大きい。杏里が両手でいっぱいだった。

「これで2週間分なの」

香りも確かによかった。ヨモギと何かの香料の匂いだ。手につけてみるとピリピリする。これがかゆみをひくのだろうか。ハンカチで拭きとるとつけた部分が薄赤くなっていたので、自分にはあわないと思った。

消絵ママがこの家にきたのは去年の秋ぐらいだという。1年近くこのお水を使っていてひどくなっているのではないだろうか。だが消絵ママは最初は一時悪くなっているようにみえるが、体の内側からだんだん治っていくからこれでいいのだという。

私は何か心の中でざわめくものを感じた。ここ地下のレッスン場ではいつも私と杏里の2人だけだ。

「ねえ、食べる物とか洗濯とか消絵ママさんはあなたによくしてくれるのね？」

「ええ、いつか私のアトピーを治してあげるっていつてくれる」

「身体と足のアトピーがましになっているけど、このことについて何か言われた？」

「ちゃんとお水はつけておきなさいって、洗濯もしてあげるから自分でしなくてもいいのよって。でも私バレエのことだけは自分でしておきたいって断ったの。ママは怒っちゃってしばらく口を聞いてくれないけどあきらめたのかな？」

私には科学的な知識もないけれど、この話を聞いて変に思った。やりすぎかと思ったがでもやっぱり変だ。さっきつけた皮膚の部分が変にぴりぴりする。

私は杏里に言った。消絵ママには内緒でしばらくこのお水を使わないように、と。そして自分の着るもの、特に下着類は自分で洗うように。

私の思い込みだと本当にいいのだけど、おせっかいかもしれないけれど、やはり変だ・・・。

それからそのお水を少しもらって私はその足で市民病院に持っていった。お水の正体を知りたかったからだ。病院にそんなことうちはしていませんと断られたがなんとか必死に頼むと遠方の化学分析センターを紹介してもらえた。

私の考えていることがもしそうだったら大変なことになる。でも消絵ママが杏里のためを思ってそうしているのだとしたらそれはそれでいい、そう思った。分析センターでも一般市民には依頼を受けないとかいろいろいわれたが、やさしそうなおじさんをつかまえて必死で理由を言うと万一のことを心配しているんだね？と言ってくれた。

簡単なものでよかったら検査してあげるって言われほつとして私は長椅子にすわって待った。

結果はなんとアトピーをなおすどころか皮膚を腐食させる酸が入っていた。私は驚いた。おじさんも「こんなの子供につけさせるなんてどうかしてる。すぐにやめさせなさい」と怒った。

第7話

子供の皮膚を腐食させて酸が入っているだなんて！

「故意に入れたんだろ？それとも子供に？なんでまた？」

私はその場で警察に連絡を入れた。大げさだったかもしれないが一刻も杏里を助けたかったからだ。後裏氏に悪かったが、そんなことまで気がまわらなかった。

あんなに子供心にアトピーで悩んでいるのに親切ごかしにもっとひどくさせる液材を与えてどうするつもりだったのだろうか。

警察はすぐに来てくれた。事情聴取を私と検査してくれたおじさんにした後すぐに現場へ急行してくれたらしい。公的な機関で検査してくれた当のおじさんの口添えがあったせいだろうとおもふ。

結果、消絵ママは逮捕された。

罪名は殺人未遂だ。

後裏氏と結婚までにはこぎつけたのはいいけれど、継子になった杏里までは愛情が持てなかったらしい。でも後裏氏との手前、かわいがっているようにみせかけたかったようだ。

例のお水は警察に押収され、さらに詳細な分析をされたようだ。

あれには酸の他にも有毒成分が入っていたのだ。

杏里はすぐに病院に入れられ身体をくまなく検査された。すでに肝臓に影響が出て肝機能が落ちていたらしい。皮膚上につけていたので反応が遅く出てそれくらいですんだのだ。不幸中の幸いだったあと2週間もつけていたら体力が急激に落ちて普通の生活に戻るところか死んでいただろうと医師が言ったそうだ。それを聞いた時にはぞっと鳥肌がたった。

杏里は気丈にふるまっていた。義母とはいえ、なついていたし必ずアトピーを治してあげると言われて信じていたのだ。だけど裏切

られた。それでも一言も消絵ママを責めたり恨み事は言わなかった。後裏氏から後日そう伺った。

「先生には感謝していますよ。消絵がそういう女だったなんて残念でならないが、早くにわかってよかった。杏里が死んでしまったら本当に取り返しがつかないところだった。助かって本当によかった、よかった。本当にありがとうございます」

後裏氏も消絵ママのことは一言も非難めいたことはおっしゃらなかった。私は後裏氏に伝えるよりも早く警察に連絡したことを責められるかと思ったがそれもなかった。感謝の言葉だけだった。

私は後裏氏に一番心配していたことを聞いた。

「あの、杏里ちゃんはいつ退院できますか？」

後裏氏ははじめてにつこりして即座に言った。

「明日です。明日はちょうどレッスン曜日にあたりますな。杏里が先生に絶対に来てもらってと言ってます。来ていただけますか」

「もちろんですわ」

「杏里は病室でも柔軟体操をしていました。身体がなまると困るからって。あそこまでバレエ好きになると思いませんでした。健康になれるならなんだってさせてやるつもりです。先生、今後ともよろしく願います」

今回の事件は小さな港町での一大スキャンダルだった。地元の新聞記事にもなった。

怪我の功名ってこういうことをいうのか私のバレエ教室は知名度があがり一気に有名になった。そして入会の問い合わせがどっと増えた。生徒数が増えることはうれしいことだ。今年は無理でも来年あたりは発表会が開けるだろう。

杏里は大きくなったらバレリーナになるそうだ。アトピーは入院中に良い皮膚科医にあたったらしく薬が変わり少しずつではあるが良くなってきている。

もっと症状がよくなったら自分の家のレッスン場でもいいけれど、私のスタジオに来て同じ年頃の生徒たちと一緒にレッスンできるように誘ってみようかと思っている。

杏里の章・完

第1話

いつもしている午前の散歩。港町で海が近いので必然的に海沿いに散歩することが多い。

今日はしけが近いのためか船がいつもよりもしつかりと止め置かれている。潮風がきつく今日は短い距離で散歩はやめようと思ったときの話しだ。

女の子が止め置き漁船の上にいた。幼稚園ぐらいの女の子だろうか。1人で遊んでいた。風が強く揺れる船上で彼女はなんと踊っているのだ。

私は立ち止った。幼稚園か何かで覚えた踊りだろうか。笑顔で手はげんこつを作り頭上にあげて、足は時々片足立ち。ひゅつと足を挙げたときを見ると彼女は相当身体が柔らかい。幼児にしては上がるのだ。

私は思わず声をかけた。

「踊り上手だねえ！お姉さんびつくりしちゃった」

女の子はぴたと踊りをやめて船上から私を見た。そして笑った。

日に焼けた笑顔はすばらしい。白い歯が朝日にあたって光っている。

「うん、あのね、これはね、幼稚園のおゆうぎかいでね、先生が教えてくれたの」

「そうだね、とってもじょうずだね。ねえお名前はなんていうの？」

「まあーい」

「ん？」

「まーあーい」

「まあいちゃん？」

「うん、そう」

「おとしはいくつ？」

「5さいです」

「ふうーん」

私はふと思いついてまあいちゃんがさっきおどった振付をバレエふうにアレンジして踊って見せた。まあちゃんは目を丸くして見た。「お姉ちゃん今のなに？すごい。足があたまのところまであがつたーっ」

「ふふ、バレエっていうのよ」

「ばれえーふうーん」

「おい、なにしてる、うちの子になにをしゃべってる」

だしぬけに横からぬつと大男が私の顔をのぞきこんだ。いつのまにか男性が横にきていた。ちつとも知らなかった。日焼けして髪が少し脱色している。水産作業用の長靴に防水耐油性のつなぎの作業服を着ている。

男性は私をじろじろ眺めてやおら私を指さしてしゃべった。

「あつ、おめえ誰かわかったぞ。おめえあっちの通りの方の身事船具店の娘だろ。どっか都会に出ていたけど、最近こっちに戻ってきてバレエとかいう踊りの先生をしてるんだろ」

「おとうちゃんー」

とするとこの人はまあいちゃんの父親か。

まあいちゃんがぱつと船から下りてとことと父親の方へ走ってきた。

「おとうちゃん」

甘えた声でまあいちゃんが手を差し出すと父親はさつと娘を片手で抱っこした。それから私に向かって言った。

「あんたバレエの勧誘か、バレエするの高いだろ。うちにはそんな金ねえぞ、よそでやってくれ」

「まあ、そんなつもりで話しかけたわけではありません。まあいちゃんがとても上手に踊っていたのでほめただけです」

「そうさ、バレエなんか習わなくともうちの子は踊りが上手だからな、さあ、さつさといってくれ」

「・・・言われなくともこれで失礼します」

バレエ教室の勧誘をしていたと間違えられるなんて・・・まあいちゃんはともかわいいけど、でも父親は何という失礼な人かしらつと私は気を悪くしていた。

「おねえちゃん、ばあいばあー」

まあいちゃんの声がうしろで聞こえたが私は振り返りもせずずん前を歩いていった。まあいちゃんには悪いけどあの父親の顔なんか見たくもなかったからだ。

第2話

その親子とはそれきり、だと思っていた。

ところが2、3日してから電話があつた。ここの電話番号がわからなかつたらしく、階下の兄が経営している船具店にかかつてまわつてきたのだ。

「娘がバレエつていうのをやりたがつているから見学させてほしい」
男性の声で父親からの電話だつた。時間帯を教えて体験レッスンは無料ですのお気軽にどうぞといつて娘さんの名前を聞くと「谷田まあいだ」という。漢字でどう書くんですか？と伺つたら「真愛」と書くんだ、と。その声に聞き覚えがあり、もしかしたらと思つていたら案の定あの時の親子だつた。

その週の子供クラスのレッスンにその親子は来た。やはり予測していた通り真愛ちゃんに強くせがまれて父親の方が仕方なく引つ張られてきたらしい。

真愛ちゃんは私を見てにつこりした。

「あのお姉ちゃん！バレエわたしも踊りたいな！」

物おじしない子で自分と同じ幼稚園に通つていた子を目ざとくみつけ手をふつた。そして終始ずつとうれしそうに笑つていた。

真愛ちゃんに体験してみようか？と言つてスリッパを脱がせ靴下だけにさせて鏡の前に立たせる。

喜んで鏡の前に友達と並んで立つ。バーにつかせて身体をまつすぐに立つことを覚えさせる。そして足の1番と2番、5番を教える。ついでつま先立ち、つまりルルベを教えた。

驚いたことに彼女はずつとつま先立ちで立てた。つま先立ちで立つことをルルベというが、かかとを落とさずに1曲全部ルルベで通したのだ。身体もななめにならずまっすぐ姿勢よく通してできた。初めてのレッスンでこれはめずらしい。年の割にはかなり身体のバランスがいいのだと私は思った。そういえばあの朝も潮風が強かつ

たが揺れる船の上に1人平気で踊っていた。いつもああやって1人で船の上にいるなら、自然にバランス感覚がすぐれてくるのだろうか。

真愛ちゃんはずっとにこにこしていた。他の生徒たちも未就学児童から小学校2年生の子まで踊るのが楽しいと思う子ばかりだからこの時間は笑顔が絶えない。真愛ちゃんの笑顔もまた底抜けに明るかった。

柔軟はさすがに硬かったが痛いとも言わない。柔軟を嫌がって泣く子供も面倒がる子も多いが、バレエをやるには身体の柔らかさは不可欠だ。真愛ちゃんは弱音をはかず、硬いなりにもずっと笑顔だった。

「はあい、これでおしまいです。また来週ねー、おうちでも練習していてね!」と言っておわりのあいさつをする。

真愛ちゃんは他の生徒たちと一緒にレッスン場のすみにもいかず鏡の前に立つてずっと足1番ルルベで立って両手を上にしたり横にしたりしてポーズをとっていた。よほど気に入ってくれたみたい。

見学している父親の谷田さんも真愛ちゃんを見てやさしい笑顔だった。だが、私がお教室の時間割と月謝を書いたプリントを持ってくると、谷田さんは「あんなかなか商売上手だな、あれから真愛はバレエをしたいとせがまれて大変だったよ」と言った。

私が商売上手だと・・・あの時も「勧誘した」とか言ったな・・・この父親は苦手だなーと思ったがそんなこと言えないし顔にも出せない。私は努めて笑顔でこのプリントをご覧になってから入会を決めてくださいねとだけ言った。

谷田さんはプリントを見て「ふん、やっぱり高いなあ」と言う。何を言うか、ここは田舎だし競争相手もないとはいえ私自身は特に有名でもないから相場よりずっと安くしているのに!と思う。

だがこの人には何を言っても無駄だろう。値下げとか言っても絶対対応するまい、と私は顔は笑顔で心の中では苦々しく思っていた。真愛ちゃんはかわいいけど、この父親は若いのお金に細かそうだ

し第一この性格が苦手だ。

バレエをするにはレッスン料はもちろんだが、初期費用としてレオタードとバレエシューズだけは揃えてもらわないといけない。これも近くにバレエ用品を売っているお店とかないし、私を通して購入してもらうかネット検索して親が通販利用で購入してもらう。今後発表会も考えているし、費用のことでごちゃごちゃ言われたくない。だから高いからという理由で断ってもらっても構わないつもりだった。

鏡を通して真愛ちゃんが父親の渋い顔が見えたのだろう。

「お父ちゃん」と駆け寄ってきた。

「ねえ、バレエさせて。バレエしたい。真愛はバレエがしたいの、ね、いいでしょ、お父ちゃん！」

第3話

「うーん、考えておくよ」

「いや、いや、真愛がしたいの。真愛はバレエするの、だってバレエ踊るの大好きだもん！」

真愛ちゃんは父親である谷田さんの首にぎゅーとしがみついた。

谷田さんは渋い顔のまま真愛ちゃんの頭をやさしくなでた。真愛ちゃんは決心したように言う。

「お父ちゃん、お金ないのね？真愛は幼稚園明日からやめる。それで一緒に船に乗ってお父ちゃんと一緒に魚取る！それで一緒に市場に売りに行こう。それでバレエ習うの！」

父親の顔が苦しそうにゆがんだ。そして真愛ちゃんの髪をなでたままやさしく言った。

「うーん・・・、そこまでいうなら・・・、いいよ。バレエをしなさい。だけど一生懸命するんだよ？いいね、できるね」

「えっ、いいの？わーい、だからお父ちゃんだいすきー！」

「・・・幼稚園も行くんだよ。お金、それぐらいは大丈夫だから・・・」
「うん、うん。幼稚園もバレエも大好きだもん。行くよう！」

これで谷田真愛ちゃんはこの身事バレエ教室に無事入会していただけことがわかった。父親は今持ち合わせがないので来週からレッスンに参加する時に入会金＋月謝とレオタード、シューズ代を出すというので私は承諾した。

そういえば真愛ちゃんの来ている服は誰かのお古のようだった。汚くはないがあちこちほころびている。レッスン場に脱がれた真愛ちゃんのくつもぼろぼろだった。父親の方は長靴だったが擦り傷だらけだ。頑丈なジャージ服にも穴が2、3個あいている。お金がないとは本当らしい。職業は漁師らしいが船は持っているし、あれならばきちんと漁協にも入っている一人前の漁師だろう。漁はこのと

ころ不作とは聞いてないので不思議に思った。

谷田親子が帰り、他の生徒も着替えが終わり帰宅すると私は教室に鍵をかけて階下に入りて行った。このバレエ教室の下は兄の一郎が経営している船具店だ。

早速兄に谷田さんのことを聞く。間髪をいれず兄は「あーあのね。若いのにたくさん借金があるのさ。うちにもつけがあるので正直困っている」と言った。

「つけ……って」

「年末に支払ってもらう約束で商品売っている。船底塗料や漁船用のエンジンオイルとか、ま、消耗品だな。谷田君の娘さん、そうか……もう5歳になったのか……。バレエを習わせるお金があるんならこつちを先に支払ってほしいのだから。お前もせいぜいレッスン料を滞納されないよう気をつけるんだな」

「滞納！困るわ、そんなの。一体どういう人なんですか？お金にルーズなの？」

「お前は最近この港町に帰ってきたばかりだから知らないんだ。いや、谷田君はあれでも真面目な男だよ。だからつけをきかせているどつちかというと谷田君の奥さん……真愛ちゃんのお母さんの方が訳ありでな……。あ、そうーか！あのお母さんはダンサーだったよ。娘さんバレエをやらせるんか？血は争えんのー」

「え、真愛ちゃんのママってバレリーナをされていたのですか？知らなかった」

「いやいや正確に言うとはバレエじゃなくってダンサーだよ」

そこへ兄嫁の蒙古モウコウさんが私達の話題に割って入った。

「夢子さん、谷田さんにはかかわらない方がいいと思うわよ。ダンサーって聞こえはいいけどヌードのダンサーでね。意味わかる？」

「又、ヌードダンサー……ストリッパーのことですか？」

「そーよ。流れ者の風俗の人だったのさ。今は刑務所にいるけどね」

「ええっ、刑務所！なんでまた？真愛ちゃんのママって犯罪者なん

ですか？」

「そ、殺人未遂でね……。もう5年前の話かな？真愛ちゃんを産んだばかりなのに、人を刺したのよ」

「お兄さん、それほんとなの？」

「うん。本当だよ。・服役しているのも本当だ。谷田君の借金ははっきり言っただの奥さんの借金さ。その上刺した人の賠償金やら何やらでね、大変そうだよ」

「まあ……」

兄夫婦の話を総合するとつまりこういうことだった。

真愛ちゃんのパパは流しのストリップパーをしていたらしい。そこへ客としてきた谷田さんと恋愛して結婚しようとしたらしい。が、彼女には借金があった。かつ借金取りといういろいろあって揉めていた。その上谷田さんと結婚を決めて退職を申し出たとき、ストリップパーとしての契約などで興行主とも揉めた。やめるにやめられない状況だったらしい。だけど谷田さんはがんばった。彼女と結婚するために借金を肩代わりすると決めたのだ。

それだけなら美談ですんだがそうはならなかった。

結婚後真愛ちゃんのパパはすぐに妊娠した。妊娠中でもご夫婦で少しずつでも借金を返そうとがんばっていた。だけど一度に全部は無理だ。話し合いがこじれてママは真愛ちゃんを産んだばかりなのに、督促にきた借金取と言い争ったあげく刺したらしい。幸い未遂に終わったがやはり犯罪にはなる。逮捕され裁判にかけられ7年間服役しないといけない。

そんな真愛ちゃんのパパを谷田さんは待っているのだ。真愛ちゃんを育てながら。

兄夫婦も世間話としてこの話をしたがそれ以上のことは知らない。私も当然知らない。だけどこれで谷田さんが妙にお金に細かいのも理由はわかった。

第4話

谷田さんがお金に困っているのはよくわかった。だけど谷田さんは真愛ちゃんにはバレエを習わせると決めたのだ。だから私は真愛ちゃんにバレエを教える。両親の事情とバレエを教えるのとは全く関係がない。他の子供と同じように私はバレエをまず大好きになつてくれるように、踊るのを楽しみつつ上手になつていくようにバレエ教師としてベストを尽くすだけだ。

次の週、約束の時間に真愛ちゃんはお父さんに連れられてやってきた。谷田さんはお金をちゃんと封筒に入れて私にきちんとあいさつした。私はそれと引き換えに用意していたレオタードやバレエシューズを渡す。真愛ちゃんはレオタードの袋をあけて大喜びしていた。レオタードはピンク色で裾がフリルになっている。バレエシューズもピンクだ。タイツもピンク。幼稚園児でピンク色の嫌いな子供はいないだろうと思つての選択だ。私の身事バレエ教室ではレッスンの指定はないが田舎なので私が代理購入しているから。

真愛ちゃんはさつそくその場で着替えた。他の子供たちも次々にレッスン場に入つて着替える。たちまちかわいい小さなバレリーナ達が1列に並ぶ。時間が来て私は彼女たちにバレエ式のあいさつをする。子供たちも私を真似してバレエ式のあいさつを返す。そしてバーにつく。

谷田さんは目を細めて真愛ちゃんの様子を見ていた。いいお父さんじゃないか。真愛ちゃんはバーについて私のいうことを一生懸命聞いてはいるが時折父親の居場所を確認して目と目をあわせてにっこりしあう。本当に仲の良い親子だ。

ただ1つ気になることがあった。それはほかの親とのかかわりだ。谷田さんの結婚と事件のことはこの田舎の港町では有名らしく田舎

なのでみな知っているようだった。

未就学児と低学年のレッスンは午後5時には終わるので外はまだ明るい。加えて家に近い子も多いので親の送迎はほばない。だけど国道沿いに住んでいる家の子は危ないからといって迎えにくる親御さんもいる。

やはり真愛ちゃんと谷田さんを私のバレエ教室で見かけてあれ、と思った人がいたようだ。真愛ちゃんと幼稚園は違うがこのレッスンですぐに仲良しになったミモちゃんのおばあちゃんがそうだった。ミモちゃんのところにはいつもおばあちゃんが毎週迎えにくる。なので新入りの子が入ったらすぐにわかるのだ。

「まあ、先生。あの子・・・例の母親の子でしょう。バレエを習うなんて・・・そのうちに裸で踊りだすのじゃないでしょうかねえ、この教室にも品位にかかわるかもよ」

聞いて驚いたがそういう反応も想像のうちだったので、すぐに「真愛ちゃんは真愛ちゃんですよ。ミモちゃんははじめみんなと仲良く楽しく踊っていますよ」と返した。ミモちゃんのおばあちゃんは眉をひそめただけで無言だった。ほかの親は何も言わなかった。私の耳に入らなかっただけかもしれない。

私はストリップの踊りは見たこともないが、男性相手の脱ぎながらのダンスショーを見せるのは自分自身では非常に抵抗がある。私にはできっこない。だけど何かの雑誌でストリップの一人だけで最初から最後までじらしながら踊るのも結構技術があると読んだことがある。スタイルも重視されるだろうし、かといって素敵とは全然思わない。だけど真愛ちゃんには関係がないだろう。親がそうだからといって子供も裸で踊るようになるとは限らないじゃないか。

私はこの件に関してはほうっておくことにした。それでよかったと思う。

そうして3カ月ぐらいになったころある依頼が舞い込んできた。それは港のはずれにある老人ホームからだった。私のバレエ教室

から慰問に来てもらえないだろうかという話だった。老人ホームのバレエの披露どころか設立して1年もたっていない。みんなゼロからはじめてのバレエなのでトウシューズを履くことすらまだ誰も許可をしていない。発表会もまだ考えていない。

話はまた階下の兄の船具店通じてだった。

第5話

兄は言った。

「港のはずれに小さな老人ホームがあるんだ。ほら国道から見えるみかん色の建物さ。名前は元魚老人ホームもとうおっていったかな。そこには元漁師のおじいちゃんや魚市場で毎朝魚をさばいていたおばあちゃんたちが大勢いる。慰問は歌を歌ったり、漫才をしてもらったりいろいろあるが、踊りつていうのはあんまりないんでね。よかつたら来てもらえないだろうか？つてさ。」

実はその所長が俺の元同級生なんだよ。お前が帰ってきてバレ工教室を開いただろ？それを聞いて小さい子が踊っているのを見たら入居者たちも喜ぶんじやないかって言ってきたんだよ。バレエ教室からの慰問つて今まで受けたことがないからよかつたらぜひつてさ」

私はうーんとうなった。

「慰問はいいけれど・・・でもまだ始めたばかりで・・・基礎もできていないのに、人様に見せるのはどうかなあ、せめて来年にでも」「名前を売るチャンスじゃないか、やってみるだけやってみなよ。バレエをみたことがない人がほとんどだし、小さい子を見るだけで喜ぶ年寄りばかりだぞ。子供も拍手をもらえたら喜ぶぞ」

私は考え込んだ。確かに子供たちは踊る楽しさは知っている。だけれど踊りを見せて人に喜んでもらえる体験も大事なかな。もっと上手になってみせる、という欲がでたらバレエレッスンにも力がいっていくかな？

名前を売り込む、というよりもいい体験をする思い出作りというスタンスでこの話を受けることにした。

で、次の日の空いている時間に元魚老人ホームを訪問した。所長

は兄の同級生で私とも顔見知りだ。名前は法式さんという。兄の友人だから私とも何度か会っている。法式さんも私のことを覚えていた。

「おお、夢子さんか、懐かしいのう。バレエ教室を開いたときいてぜひ踊ってほしいんだ。きつとみんな喜ぶよー」

「トウシューズを履いて踊れる子はまだいないんです。バレエシューズで衣装もレオタードのままとか簡単なものでいいですか？それと長くはまだ踊れないし小品ばかりでそれでもトータルで20分ほどの時間になりますけど」

「いっぱい条件を言ったし、時間も短いし……。本当に大丈夫かと思ったが法式さんはにこにこして「いいさ、いいさ。それでいいさ」と言う。私もなんだか気が楽になってじゃやってみようかと決心した。

ざつと会場になる大広間をみたが舞台というほどのことはなく、ちよつとした段差があるだけだった。それでも小さな子供が踊るにはいいかな？床はワックスでぴかぴかに磨かれてあり滑らないかは心配だったが松ヤニスプレーをかければいけるかな？とも思った。

私がそうして会場を見ていると車いすのおじいちゃんや杖をついたおばあちゃんたちがお茶のテーブルについている。ゆつくりぽつぽつと会話をしておられる。時折私と法式さんを見てにこにこしている。老人ホームって時間の流れがゆるやかなのかな？

これなら発表会にうるさいことを言う人もいないだろう。気楽にお受けすることに決めた。

さあ、何を踊ってもらおうかな？

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6450w/>

身事バレエ教室

2011年12月2日05時45分発行